

【5】なぜ徳島に城下町ができたのか

16世紀終わり頃に阿波国に入った蜂須賀氏は、河口デルタ地帯に城下町をつくり徳島と名付けた。城下町徳島には、どのような身分の人たちが暮らし、どんな特徴をもった都市になったのだろうか、説明しよう。



「阿波国徳島城之図」
1646(正保3)年(個人蔵)

上の城下町の絵図
を見て、どんなこと
が分かりますか。



蜂須賀氏の支配と徳島

1585(天正13)年羽柴秀吉(のちの豊臣秀吉)による四国平定後、阿波国は秀吉の家臣として活躍していた蜂須賀氏(尾張国蜂須賀村出身)に与えられました。蜂須賀氏は、はじめ要害堅固な山城・一宮城を本拠としましたが、あらたに、吉野川河口のデルタ地帯に位置する涓津を中心に、徳島城と城下町の建設を開始しました。翌1586年には徳島城の中心部が完成し、ここを新しい拠点として徳島藩の領国支配を進めていきました。

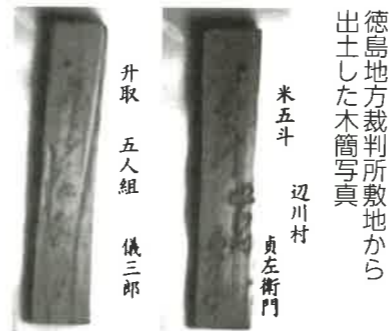
一方、蜂須賀氏は、徳島城築造と同時に、阿波国内に九つの支城三好郡大西城・美馬郡脇城・麻植郡川島城・板野郡西条城・同郡岡崎城・名東郡一宮城・那賀郡富岡城・同郡仁宇城・海部郡鞆城)を設置し、そこに重臣と兵300人を駐屯させた軍事体制を主軸とした領国支配を行いました。しかし、1615(元和元)年・1638(寛永15)年に幕府が出した一国一城令によって九城は廃止され、徳島城だけが支配の中心として位置づけられ、城下町の拡大が進みました。支配体制が、軍事中心から行政中心へと徐々に移っていったのです。

徳島城下町の構成

城下町の大半は武家地でした。城の周囲には重臣の武家屋敷や、領内からの年貢米等を納める蔵が広がり、城の東の安宅には水軍の基地が、城下町の端にあたる佐古・富田・助任には足軽屋敷が置かれました。眉山山麓には寺町が置かれました。一方、町人地は、新町川をはさむ内町と新町や、福島・助任・佐古に置かれま



「徳島子蘭盆組踊之図」(個人蔵)



徳島地方裁判所敷地から
出土した木簡写真



絵はがき「藍場の昔懐かしき新町川」(個人蔵)

貞享2(1685)年の徳島城下		
地区	町名	軒数
内町地区	紙屋町	87
	紀伊国町	87
	通町	76
	新シ町	101
	西横町	34
	魚町	42
	東船場片町 西船場片町	5 18
福島地区	福島片町	47
助任地区	助任片町	57
	同所裏町	4
	同所裏	15
	同	12
	同所裏	17
新町地区	新町橋筋	12
	鍛冶屋町	92
	富田町	48
	紺屋町片町	12
	桶屋町	28
	新魚町	35
	湯屋町	15
	刻町	14
	新町東船場片町	11
	新町西船場片町	49
佐古地区	大工町	123
	新小橋筋	50
	下代町	19
	法花寺町	15
	西新町筋	174
	西新町山路片町	21
佐古地区	佐古町	155
合計		1,558

『大正三年版「阿波藩民政資料」より作成。町名・数字は原文のまま。』

した。町人地には、町が自治組織として存在し、町奉行を中心とした町方支配のもとに編成されていました。17世紀後半には、町人地だけで人口20,590人(家数1,558軒)となるなど、領内の商工業の中心地として栄えました。

「水の都」－物流の結節点－

徳島城下町では、いくつも流れる川筋を、天然の堀として軍事的に利用すると同時に、船による物資の輸送や水上交通にも利用しました。城下町の武士や町人たちの生活のためには、多くの物資を領内や各地の都市から移入させる必要があったからです。一方、城下町は、領内の産物を、大坂や江戸をはじめとする全国各地の都市に販売していく拠点としても機能していきました。例えば、新町川沿いの藍場浜周辺では、18世紀後半から藍大市が開かれ、白壁の藍倉が建ちならぶなど、領内でつくられた藍玉染染の取引の中心となりました。

1894(明治27)年には、徳島市の人口は6万人弱と、四国第一の都市となりました(全国第11位)。しかし20世紀初頭に藍産業が衰退し、20世紀後半以降は陸上交通が主流となるのにしたがって、「水の都」の様相は大きく変化していきました。

町人地で盛んになった文化には
どんなものがある
のでしょうか。



チャレンジ

阿波の産物(藍・塩・材木など)は、阿波のどの地で作られ、どこに販売されていったのでしょうか。地図に表してみよう。